

# 安心の設計



介護、医療、子育て、老後に関するご意見・疑問をお寄せ下さい  
メールansin@yomiuri.com ファクス03・3217・9957



さかうえ・かずこ 1954年7月、大分県別府市生まれ。東京都新宿区のNPO法人「病気の子ども支援ネット遊びのボランティア」理事長。活動の傍ら、武蔵野大大学院で実践福祉学を学び、2015年3月修了。保育士と社会福祉士の資格のほか、調理師の免許を持つ。

東京都新宿区を拠点に、近くにある国立病院などに入院する子ども

もに付き添う家族のため、お弁当を届ける活動をしています。「お



病気の子どもと家族を支えるボランティア

坂上和子さん 69

## 「料理」で親にも寄り添う

「子どものためにも、お母さんたちが元気でいることが大切だ」。そんな思いにかられて始めたのが、お母さん食堂でした。

都内の専門学校を卒業後、保育士として同区の保育園や障害者支援施設で働きました。1991年6月に、現在の国立国際医療研究センター病院(新宿区)で、入院する子どもたちと遊んで心を癒やすボランティアを始めました。同病院は小児がんなどで長期入院する子どもたちが多いためです。

母さん食堂」と名付けていて、事務所に家族を招き、ご飯を提供することもあります。お母さんたちは久しぶりの温かい食事に「涙が出た」と喜んでくれます。

きちんとした料理を出すことが信頼につながるかと考え、2022年3月に調理師免許を取りました。お弁当の配達先は同病院を含む4病院に広がりました。

22年5月には、病気の子どもを失った家族を対象とする料理教室を始めました。息子さんを亡くしたお母さんから、「悲しみを癒やす」「グリーフケア」の場が欲しい」と相談されたからです。医療者のような専門的なケアは無理でも、「料理を通じて何かできれば」と考えました。

教室は毎月1〜2回、事務所で開いています。当事者同士、本音を語り合う場にもなっています。時には編み物をしたり、ハイキングに出かけたりもします。

参加者の一人は「この場所がなくなったら困る」と言ってくれました。お子さんの闘病中だけでなく、亡くなった後もサポートする大切さを実感しました。

子どもたちと病棟で遊ぶ活動は、新型コロナウイルスの感染拡大

大で中断していました。国が今年5月、コロナの扱いを見直したのを受け、病院側と再開に向けて話し合っています。

4人きょうだいの3番目に生まれ、幼い頃に両親と死別するなどして、親戚の家を転々としてきました。都内で働く姉と兄、幼い妹の4人だけで暮らしたこともありましたが、小学5年の時、妹と都内の児童養護施設に入りました。

今でも、施設で出迎えた外国人のシスターが抱きしめてくれた時のぬくもりを覚えています。親切な人々のお陰で、これまで生きてきました。その恩を社会にお返ししたいのです。

うれしいことに、お母さん食堂を利用してくれた人や、活動に共感してくれた人から、寄付が届きます。「支え合いの輪が広がっている」。社会に対する感謝の思いが強まる瞬間です。

(聞き手・小池勇喜)